

シリーズ

「ある監督官の問わず語り」(第 2 回)

— 日本語と熱中症 —

世にある言語のうち、日本語は、記述言語として習得するのが極めて困難なもののひとつだと言われている。

平たく言うと「話すのは楽だが、書くのは大変だ」ということだ。『ブドウ』『レモン』のような、日本人でさえなかなか漢字では書けない言葉が存在するのはもちろん、特に外国人は、ひとつの漢字に対して複数の読み方があることに苦労するという。例えば「一日から三日までは日曜日が祝日で、いずれも晴れの日でした」という文章、これを正しく読める外国人はなかなかいない。なぜなら、この文章で六か所に出てくる『日』という漢字の読みが、すべて異なるからである。

漢字の読みは、文脈から判断しなければならないこともある。例えば「手紙を認める」という文章は、「提出された手紙を認める」ならば『みとめる』、「恋人への手紙を認める」ならば『したためる』と読まなければならない。

何千何万とある漢字をすべて覚えなければならない上に、こうした複雑な読みがあることが、日本語をして「記述するのが難しい」と言われる所以である。

とはいえ、『正しさ』に拘りさえしなければ、日本語はかなりルーズな言語でもある。上司が部下に言う「あー、あのな、あれな、あれとあわせてあれしてくれんか」、夫が長く連れ添った妻に言う「……ん!」、原始人が言う「オレ ニク クウ シアワセ」どれもおおよそ通じてしまうのだから、日本語の懐は深い。

というより、そもそも言語というのは押しなべてそういうものなのだ、とも言える。昨年、ピコ太郎の「ペンパイナッポーアッポーペン」が大流行したが、よく聞いてみると、ピコ太郎は「I have a apple」と言っている。文法的にはもちろん「I have an apple」が正解だが、外国人にも普通に通じていて、特に指摘をする者もないのである。意外といい加減なものだ。

言語とは、コミュニケーションという『目的』のために発達した『手段』だ。意思疎通を図るといふ目的さえ達成されれば、文法読み方云々などという『手段を目的にする』ようなことは、言うだけ野暮なのである。

ところで、『中る』という言葉の読みをご存じだろうか。答えは『あたる』だ。『中』という漢字には『当たる』と同じ、的中する、命中する、中

毒になる、といった意味がある。『熱で中毒になる症状』のことを『熱中症』というのは、このためだ。

熱中症については、夏の暑い時期のものだと思われがちだが、実は春先の夏日にも起きている。五月に発生した死亡災害の事例も少なからずあり、職場で熱中症を防ぐためには、通年とまでは言わずとも、今から対策を考えておくことは不可欠だ。

とはいえ、熱中症対策の通達を読み込むと、WBGT 値がどうの、服装による補正がどうの、風のあるなしがどうのといったように、とにかくややこしい。筆者もかつて、ある業者の方から、「小さな現場でこんな全部できるわけないだろう」という苦情をいただいたことがあったが、確かにどこから手を付けていいかわからないというのも、あながち的外れな意見というわけでもないと考えている。

しかし、ここでひとつ考えていただきたいのは、そもそもこの対策は『熱中症を予防する』ために講ずべきものだ、ということだ。

確かに、通達に沿った細かい対策をすべて正しく行うことは、大きな現場でなければ難しいかもしれない。だが上述したとおり、熱中症とは『熱に中る』ことが原因で起こる疾病だ。だとすれば、とにかく『熱から離せば』防止できるのである。その観点があれば、暑い(と体感を覚える)日の休憩時には体を冷やすこと、水分塩分をこまめに補給すること、作業員の体調に気を配ることが自然にできるようになる。必ずしも熱中症対策の通達に忠実でなくとも、その趣旨を理解し、何が目的で何をすべきかが自分の頭で考えられれば、熱中症はきちんと防止できるのだ。

行政はもちろん、百パーセントの対策を策定し、要求し、指導する(それが役目だ)。だが、仮にそれができない環境下であっても、趣旨を違えず対策を講ずることは可能だ。完璧ではなくとも、その目的を達することができるのは、対策も日本語も一緒。「うちじゃこんなものはできない」と端から諦めず、片言で話すように、『できる対策から取り組むこと』から始めるのが、とにかく第一歩である。

温暖化の影響だろうか、近年は夏の訪れがやけに早い。『意中』の『熱中症』対策を『夢中』になって仕掛けていただければ幸いだ。